

第41回児童生徒読書感想文コンクール



今年度で41回目を数える児童生徒読書感想文コンクールに、今回も優秀な作品が数多く寄せられ、29点が入賞作品に選ばれました。各賞を受賞した児童・生徒の皆さんを紹介します。また今月から、各部門の最優秀作品を順次紹介していきます。

※コンクールの審査対象は小学校3年生以上。

■小学校3年生の部 最優秀賞 チームワークは大切だ

弟子屈小学校 小野 心桜さん

私は、「ぼくらの秘密結社」を読みました。私はこの本から、チームワークは大切だと学びました。

チームワーク……。この本は、ある人を守るため、仲間が助けるストーリーでした。この本のチームワークがわかる場面は、次の所です。

天野は、仲間を助けるための準備をした。色々なひみつへいきを用意した。そしてあるスイッチをおすと地獄(八)へ落ちるスイッチを作ったのだ。それから、仲間は様々な場所に別れて、行動をはじめた。「スイッチをおすぞ。」

そのスイッチのおかげで、ボスは消えてしまった。「やったぞ。」
英治が叫ぶと、安永と谷本が部屋に飛びこんだ。
「このように、チームワークをよくすると、仲間を助ける事ができるのです。チームワークは仲間のために色々と考えて行動すること。だから色々な人と協力して行動することが大切だと思います。」

私もチームワークを経験したことがあります。一つ目は、学級の給食の時で、クラスの人々が給食をこぼしてしまいました。その時、私が、「こんな時こそ、チームワークだよ。」と言ったのです。この言葉から、みんなが

いっしょけんめい動き始めたのです。そして、あつという間に片付いたのです。この時、チームワークの大事さをあらためて感じたのです。

二つ目は、運動会の時です。運動会で三年生は、ボール送りリレーをしました。そのボール送りリレーで、白組にぎりぎり勝てたのです。前半はまげそうになったのですが、声かけや助け合いをすることで勝利することができたのです。この時は、みんなの心が一つになったと思いました。

三つ目は、体育のキックベースボールです。キックベースで、さいこの戦いになった時、だれかが失敗しても、点数を取りもどそうとして、みんなががんばりました。負けてしまったのですが、一番楽しいキックベースになりました。

この時、スポーツでも、チームワークができることがわかりました。このように、チームワークは、みんなを助け合うことです。これからも、自分からチームワークを見つけれたり、作ったりしていきたいと思います。

みんなのように……
天野のチームのように……

(書名)「ぼくらの秘密結社」 宗田 理／著

(寸評)「ぼくらの秘密結社はぼくらの七日間戦争」から始まる宗田理の描くシリーズ十八作目です。小野さんは、登場人物である高校生たちが助け合う姿と、今の自分やクラスメートの姿を重ね感じた「チームワークの大切さ」への想いを書きました。読書には、自分の生活を見直し、日常からの再発見をさせてくれる良さがありません。そのことをあらためて伝えてくれる、すてきな感想文ですね。

小学校の部 6年生

参加数 61点

▶最優秀賞/大越 愛梨奈さん (弟子屈小)



▶優秀賞
今野 竜志 君(弟子屈小)
青木 華央 さん(弟子屈小)

小学校の部 5年生

参加数 47点

▶最優秀賞/坪井 謙尚 君 (奥春別小)



▶優秀賞
川井田 稜 君(弟子屈小)
沢原 美義 さん(弟子屈小)

小学校の部 4年生

参加数 55点

▶最優秀賞/島津 佳歩 さん (川湯小)



▶優秀賞
宮崎 夢花 さん(弟子屈小)
杉本 凌駕 君(川湯小)
南雲 空 君(美留和小)

小学校の部 3年生

参加数 58点

▶最優秀賞/小野 心桜 さん (弟子屈小)

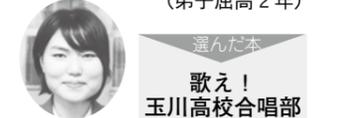


▶優秀賞
齋藤 早稀 さん(川湯小)
土田 英恵 さん(和琴小)

高等学校の部

参加数 103点

▶最優秀賞/鈴木 理美 さん (弟子屈高2年)



▶優秀賞
大井 美侑 さん(第高1年)
更科 宏記 君(第高2年)
高橋 希歩 さん(第高2年)

中学校の部 3年生

参加数 51点

▶最優秀賞/芝田 遥夏 さん (弟子屈中)



▶優秀賞
橋村 友斗 君(弟子屈中)
森島 望 さん(弟子屈中)
谷田 優花 さん(弟子屈中)

中学校の部 2年生

参加数 51点

▶最優秀賞/石川 瑠望 さん (川湯中)



▶優秀賞
下谷 愛美 さん(川湯中)
行木 涉真 君(弟子屈中)
佐藤 穂香 さん(弟子屈中)

中学校の部 1年生

参加数 52点

▶最優秀賞/畠山 颯太 君 (弟子屈中)



▶優秀賞
池上 知乃新 君(川湯中)
濱岡 菜月 さん(川湯中)
芝田 光太郎 君(弟子屈中)

■小学校4年生の部 最優秀賞 竹田津先生が気づいたこと

川湯小学校 島津 佳歩 さん

「あつ。この本いいんじゃない?」
その本は、おばあちゃんが送ってくれた本で、以前から、私の本だにありました。しかし、北海道に引っこしてきて、家の周りにきつねがたくさんいるので、読み直してみることになりました。

この本は、じゅう医の竹田津先生の所に、ぼくが送ってきた子ぎつねを先生が育てるといってお話です。ぼくは子ぎつねヘレンは、あのヘレン・ケラーのように目、耳、きゅう覚がきかないというきつねでした。

私が一番印象に残った場面は、ヘレンの悲しみを先生が分かったところ。先生は「砂場をつんのめったときに口のなかにとびこんだ、砂のことを思い出しました。わたしはおもわず舌をだして、くちびるについた砂をとろうとしていました。へろ、へろ、へろ、そしてべつとつばをはいていのです。そのときに砂には味の無いことに気づいたのです。」と書いています。私がどうしてこの場面が好きになったかという、先生がヘレンの大きさ、苦しみ、不安に気づいた場面だからです。

私も、目が見えないということはどういふことだろうと思って、タオルで目かくしをしました。私は十分くらいは目かくしを続けられるだろうと思いましたが、二三分くらいしかできませんでした。なぜかという、とてもこわかったからです。私は、家の外にどういふものがあるか知っていたので、あまりものにぶつかりません

私は、しば犬をかっています。私の犬はヘレンのようなことはないけど、先生がヘレンを大切に育てていた様子を読んで、私も、私の犬のこともっと大切に育てていきたいと思いました。

(書名)「子ぎつねヘレンがのこしたの」 竹田津 実／著

(寸評)本を読み進めながら、ヘレンの大きさを少しでも知ろうとタオルで目かくしをする佳歩さん。そんな姿からも、相手の気持ちに近づきたいという優しさや真剣さが伝わってきます。また、本を読み直すことは、とてもよいことです。環境が変わったり、色々な経験をしたりしていく中で、考えや感じ方が変わってきます。これからも、読み直してみたいかなるようなすてきな本と出合えるといいですね。

